

この人と30分



発刊100号特別企画

# フロンティア スピリットが大切

農林水産省林野庁長官

小澤普照(おざわ ふしゅう)氏

ぶらり訪問③

訪問インタビュー第3回は  
本紙第100号発刊特別企画、  
昨年8月林野庁長官に就任し  
た小澤普照氏。去る2月下旬、  
公務ご多忙の長官室をぶらり  
訪問。林業総論から木材各論  
までを熱っぽくお話し願った。

### 林業を放棄した 国はない。

Q・我国林業、木材産業の現  
状をどのようにお考えか？

A・日本は先進国と言われる  
が、林業、木材産業につい  
ては、どう考えても先進国  
とは言えない状況にある。  
北欧、カナダなどでは、木  
材産業が国の基幹産業とな  
っているように、先進諸国  
で林業を放棄した国はない  
それは何故かをもっともつ  
と研究しなくては。

Q・小ロット、急傾斜地等我  
国林業の特色が強調される  
が？

A・外国の実情を見ても、す  
べてが平坦な地形ではない  
ことが分かってきた。そこ  
で供給側の問題として、高  
性能機械導入が考えられて  
きた。林業機械メーカーだ  
けではマーケットが狭く元  
気が今一つ出にくかったが  
大手建設機械メーカーの参  
入で、ベースマシンとアタ  
ッチメントの分離発想が持  
た

### 配送面、機動力 付与に知恵を。

Q・加工・流通の川下問題は  
どうお考えか？

A・外国との比較で言えば、  
木に価値を認める国民性を  
考えれば、日本の方が有利  
ただ発注後一ヶ月も掛から  
ず入荷できる外材の機動力  
を見習いたい。価格、量だ  
けでなく、乾燥、カンナが  
けと、日本の需要に合わせ  
建築現場での使い易さにも  
貢献している。ローコスト  
化も大切だが、配送面での  
機動力付与に知恵を絞らな  
い。

### 業界人自らの アイデアを。

Q・加工に絡む国際化の進展

も詰めた話し合いが必要だ  
と思っている。  
Q・同様に行政サイドにも、  
山づくりだけでなく、木材  
の流通、加工といった川下  
の解る人材が大切というこ  
とでしょうか？  
A・全くそのとおり。人材の  
養成、確保に努力したい。

### 流域管理と 成長主導企業。

Q・ひとつの提案として、国  
産材の「流域管理」の思想

の中に、国有林、民有林の  
垣根を取り払い、流域特性  
を生かしながら素材生産だ  
けでなく、集荷、加工、販  
売、PRまでをひとくくり  
した中で国有林の人材、技  
術、情報、土地等のストッ  
クまでを導入し、地域林材  
業の成長を主導するような  
リーディングカンパニーを  
育成することについては？  
A・言及のリーディングカン  
パニーも突如優秀な企業が  
できるわけではないし、人

で技術開発はますます避け  
て通れない課題と思うが？  
A・素材レベルでの技術開発  
では、技術研究組合が五つ  
でき、ご存じのスーパール  
ッドプロジェクトなど、着  
実に成果をあげつつある。

Q・技術研究組合は中小零細  
の木材業界には高嶺の花で  
は？

A・確かに組合の構成は木材  
とあまり縁のない一流企業  
が多い。国は潤滑油として  
ある程度の資金を用意する  
と、今まで無縁だった業界  
企業が人材を投入してくる。  
まさに民間活力そのもの。  
業界、企業の大小に関係な  
く、これが基本ではないか。  
何かあると「役所考えてく  
れ」「何かしてくれ」一辺  
倒の行政依存、陳情のみで  
なく、業界人自らのアイデ  
イアを持ち込んで「一緒に  
考えてくれ」「これを手伝  
ってくれ」との姿勢を歓迎  
する。まず「俺がやってや  
る」のフロンティアスピリ  
ットが大切。そのために林

任せではないけない。まず、  
林材業界の方々が一人心  
の投資をする位の結束力が  
ないと、自分の手取りを増  
すには自らがもっと積極性  
を持つこと。「自分がやらな  
いで誰がやる」の発想が真  
剣味を生むと考える。

Q・行政としては？

A・奇手・奇策ではなく、問  
題解決の本質を見抜く力と  
積極性を持つことが大切と  
思う。

### 静岡は、モデル 地域を目指して。

Q・最後に、静岡の木材業界  
に向かって一言……。

A・静岡県には川上、川下一  
環したモデル地域づくりを  
目指して頑張っていただき  
たい。大消費地に近く立地  
条件は誠に有利なのだから  
やる気をさらに大きく持っ  
て欲しい。私が静岡県人な  
らば断然ハッスルするとこ  
ろだが(笑)……。

(文責 編集室)



### プロフィール

昭和9年新潟県生まれ・32年東京大学農学部  
林学科卒業・同年農林省入省・高知営林局長、  
林野庁指導部長、業務部長、次長を経て、平  
成2年8月より現職・この間昭和59年には国  
産材モデルハウスの晴海GLショーへの展示  
やサンドライ等国有林の取引情報のオンライ  
ン化を指導・そして今回長官として関税問題  
等の国際化対応と共に国有林の再建等の難問  
にあたる・「努力をモットーに手抜きをしない  
ことが基本」とはご本人の弁・「建築雑誌  
を読むことと通年花木を絶やさず咲かせるこ  
と」が趣味・血液型B。

### 行政に川下の 解る人材を。

Q・人材育成は技術開発と共  
に重要な課題だが？

A・宮崎県では中高一環の県  
立学校を山村地域の活性化  
構想に取り入れて進めると  
いう。最終的には能力のあ  
る若い人が、業界に増える  
ことで活力が出るわけだか  
ら、この「森林環境を生か  
し、教育環境を変える発想」  
を単にユニークと片付けな  
いで、各県の教育関係者と